『更級日記』における験の杉について

―その象徴表現と機能を中心に―

首藤卓哉

『更級日記』は、先行する作品から多くの影響を受けている。作者である菅原孝標女が使うことばには、文学的な機微を読み取ることができ、特に、日記中に登場する植物に関することばには、象徴的な意味合いが込められているものが多い。そこで、小考では、作者独自のことばの意味や暗示、比喩などに注目しながら考察を加え、作中に登場する「杉」の象徴表現と機能を明らかにしたい。

『更級日記』の冒頭部分で「薬師仏」に「身を捨てて額をつ」くほどに『源氏物語』を所望している場面がある。実際に、京に帰り着いた後に『源氏物語』全巻を手にいれ、光源氏のような人物を夢見たりしている。このような点から、孝標女が『源氏物語』から、なんらかの影響を受けていると考えられる。

そこで、『源氏物語』の中に登場する「杉」に着目してみると、「賢木」「蓬生」「関屋」「玉鬘」にそれぞれ一例ずつ、「手習」に二例の、計六例「杉」が使われている。そして、六例中五例が、「恋愛」や「男女の出会い」を想起させるように使用されており、さらに、その中の四例が和歌で使用されていることからも、「杉」が特別な象徴表現と機能を持っていることがわかる。

なお、『源氏物語事典』で「杉」を調べてみると「『しるしの杉』として古来神木とされた」とある。これに関する記述は『風土記』の「伊奈利」の逸文に、「風土記に曰はく、（中略）社の木を抜じて、家に殖ゑて禱み祭りき。」とあるのが見える。伏見稲荷大社の神木は周知の通り「杉」である。また、この部分の頭注には、稲荷神の顕現の木として、古来より「験の杉」と呼んで禍福を占ったとある。これで、上代の頃から、「杉」が神木として扱われており、その神木としての呪力や効験など、なんらかの点が、『源氏物語』に、象徴表現として活用されているのではないか、と考えてみた。

つぎに、『稲荷記』（『稲荷大社由緒記集成』稲荷伏見大社社務所）をあたってみると、奥書に「正慶元年十月廿六日」とあり、鎌倉末期から室町初期にかけての文書ということがわかる。内容としては、稲荷神社にいらっしゃる稲荷大明神には、「女性を男性と結ばせる効果」があり、何よりも「王権へ近づく」「宮中に入る」という利益があるということが窺える内容になっている。これらのことから、稲荷の神には「恋愛」や「王権」「宮中」に関わる利益があり、また、その稲荷のご神木である「杉」にも同等の力があると考えることができよう。

また、『大鏡』にも、稲荷詣でをし、帰宅すると自分が天皇の位につくことになったという話があり、「稲荷」と「王権」の関わりを示すものになっている。

これらのことから、平安～鎌倉時代には、「杉」は「権力」や「恋愛」の象徴表現として、当時の人々の間に共通理解があったものと思われる。

では、その「杉」が『更級日記』の中では、どのように使われているのか、それを考察してみたい。日記中に「杉」の例は三例あり、その中の二例は「紅葉」とともに使用されている。

この「紅葉」については、拙稿（『國文學試論』第十八号　平成二一年三月）で述べたように「宮中」の象徴表現となっている。ここで、作品の構造に焦点を当ててみると

しるしの杉 ↓ 紅葉 ↓ 紅葉 ↓ しるしの杉

となっていることがわかる。日記中における、これらのことばが使わ

れる時系列の間隔や配置、場所を考えると、孝標女が意図的にこれらのことばを使ったと考えられる。

また、最後の三例目は、夫が死んだ直後の場面で使われる。ここでは、「験の杉」の夢にしたがっていれば、乳母になって内裏に入り、帝などの庇護のもとにあったであろうということが語られている。夫の死により、宮中に入ることが絶望視されたゆえの文章であることが窺える。つまり、ここでも「験の杉」が「宮中」に近づくためのものとしての象徴表現として描かれているのである。

以上からまとめると次のことが言える。まず、『更級日記』の中で「杉」がもつ象徴表現は「宮中」や「王権へと近づく」という象徴表現である。そして、孝標女が『源氏物語』から、多くの影響を受けており、「宮中」への憧憬だけではなく、『源氏物語』の象徴表現をも利用していることからも、『源氏物語』そのものへの憧れが「杉」が登場する場面では、より強く描かれているといえよう。

（大学院文学研究科国文学専攻修士課程）